

「二」 次の文章を読んで後の問に答えなさい。

それはもう十年も前のことになる。

十年前というと、まだ戦争中のことだ。戦争中だというのに、大の男がせっせと防波堤に通って、魚をつる。それも僕だけじゃなく、防波堤の常連とでも言ったようなのが、十人近くいた。それに半常連。フリの客など。それに本職の漁師も時にこれに加わる。その本職の漁師たちは、おたがい大阪弁で会話した。その海は九州のある湾だから、すなわち彼らは他国者だというわけだ。

つまり何かの事情で移住してきたこれらの漁師たちは、その湾の漁場は土地の漁師にしめられ、また舟を持つ余ゆうもないらしく、余ぎなくこの防波堤にも仕事にやってくる。大体そういうことらしい。移住してきた事情は聞かなかった。彼らは総じて身なりも貧しく、態度も粗野だった。大阪弁がかえってその粗野な感じを助長した。それに彼らは僕らを、防波堤の常連たちを、敵視しているような気配もあった。その連中の多くは、防波堤の礎石についた赤貝を採る。四月や五月、そんな水の冷たい季節でも、平気で水にもぐる。ヒラメのように体を平たくしてしずんで行き、二分も三分ももぐっている。彼らが時につりざおをたずさえて、僕らの仲間入りをする。

これら本職のやり方を見ていて、僕は素人と玄人のつり方の差をはっきりと知った。

つまり本職のつり方は、あらゆる合理的な考えの上に立っている。だいいちつれそうな天候や潮具合の時しか来ないのだ。ところが素人常連のは、魚の引きを楽しむためにわざと弱さおを用いたり、必要でもないのに^{〔注1〕}リールざおを使用したりする。まあこれは一種の頹廢だ。その中にある『是が非でも』つり上げようとする漁師たちのやり方は、はっきりと目立った。それによって生活を支えるか支えないかの差異だろう。それに体格もちがっていた。彼らのはだは赤銅色で、手足もたくましかった。僕らは、老人もいたし若いのもいたが、概して

虚弱な感じの者ばかりだった。戦争中のことから、生きのいいのは大たい兵隊とか工場に引っぱられている。のん気に魚つりなんか出来るのは、病氣上がりの虚弱者なのだろう。この僕がそうだった。胸の病氣のあとで、しばらくのんびりと魚つりでもして暮らせと、医者から言われたのだ。

その子供たちが、この漁師のだれかの息子かどうか、僕は知らない。しかしかれらは子供のくせに、やたらに魚つりがうまかった。僕などにくらべて、いつも二倍か三倍もつり上げてゆく。玄人級だ。身なりもよくないし、つり道具もお粗末なものだ。それでたくさんつる。二人とも体にくらべて頭が大きい。貧相な感じの子供だった。頭が似ているから、兄弟なのにちがいない。上は数え年で十二か十三、小さい方は十歳ぐらいか。

それは七月ごろだったかしら。そのころはメバルはすでに遠のいて、セイゴ、キスゴ、平あじ、ハゼなどの雑魚が来ていた。日によってはボラが群をなしてやってくる。よくつれてえさが足りなくなることもある。僕の使えさは大たいデコかゴカイ。デコやゴカイよりも岩虫の方が適当だが、これはなかなか手に入らない。さらに防波堤のへりに付着する黒貝の肉、これが最上なのだが、これは常連がおおむね取りつくして、ほとんど見当たらない。そこでゴカイ。

毎日毎日魚つりをつづけている中に、初めはあまり気持良くなかったが、僕はしだいにゴカイという虫が好きになってきた。ゴカイというのは、形はムカデに似ていて、赤い色の虫だ。まったく見慣れると、ゴカイは女体のようになまめかしい。問二えさ屋で買うゴカイが、つぶがそろって生きがよければ、僕の心はおどる。身もだえするゴカイにつり針をさすのは、一種のふしぎな快感があった。

で、その日はくもっていた。沖の方が暗くて、夕立が来そうな気配もあった。僕は沖の方に向いてつっていたのだ。防波堤の外側と内側とは、その日によってつれ方がちがうし、またつれる魚の種類もちがう。その日は外側の方が当たりが良くて、皆そちら側にさおを出していたというわけだ。

その子供たちは、えさを使い果たしたのか、人のびくを見て回ったり、足を組んで沖をながめたり、そんなことばかりしていたんだが――、ふと僕はえさをつけかえようとして、かたわらのえさ箱を見た。するとゴカイがいなくなっている。

まだ十四余りいたはずなのに、それが、二、三匹になっていて、その二、三匹も箱のふちにひっかかって、だらしないのび縮みしている。問三

盗ったな！僕ははっとあたりを見回した。その子供たちは、内側の方にこしかけている。ふり返って僕をながめていたらしい小さい方の子供の視線と、僕の視線がパッと合った。急におびえた表情になって、視線を外らして、すこし身体を兄の方にずらすようにした。兄の方は、だまってつり糸を垂れたまま、じっとうきをながめている。問四

さっきまでつりは止めて、そこらをウロチョロしていたし、またぼんやり海をながめていたではないか。今海面を見つめている兄のこわばった顔は、痛いほど僕の視線を感じているにちがいないのだ。僕は意地悪く、しばらくじっとそこから視線を放さないでいた。そう言えば先刻、僕のかたわらで何かかすかな音がした。僕はそれに氣をとめないでいたのだ。あの足音は至極かかった。そうか。えさを盗るのに、弟を手先に使ったな。そう僕は判断した。僕はそっと立ち上がった。弟がその僕をちらと横目で見た。僕はさおをたたんで帰り支度をした。えさ箱をびくにしまい、かぶっているムギワラ帽の中からたばことマッチを出し、火をつけた。それからそろそろ子供たちの方に近づいた。

僕が近づくと、二人は急にきん張したようだった。かたくなに僕の方を見ないようにして、ことに弟の方は背をかたくして、あきらかにおそれに満ちた表情でそっぽを向いている。子供のえさ箱の中には、僕のと大体同じ型の同じ大きさのゴカイが、ぐにゃぐにゃともつれ合っていた。そして子供のうきがビクッと大きく動いた。

「そら、引いてるじゃないか」

そう僕は言いかけて、途中^とで止めた。兄はつりざおを上げようとはしない。じっとしている。うきが動かなくなって、それからそろそろとさおを上げた。糸の先は針ばかりになっている。えさをとられたのだ。

「バカだな。しっかりしろ」

問五

そう言おうとして、僕はやはり言わなかった。向こうも内心ジタバタしているが、別の意味でこちらもジタバタしている。その意識が急に僕の口辺をこわばらせた。僕はそのまま背を向け、ふり返らず、まっすぐに防波堤を岸の方に歩いた。防波堤は岸に近づくにつれて低くなり、満潮時だから海水に没^{ぼつ}している。ひざ頭までひたす海水を、はねのけるような気持で進みながら、何だかやり切れない感じがしだいに強くなって来た。子供たちかなめられたような気がしたのか、子供の所業がしゃくにさわたったのか、またその所業を見のがした自分がやり切れなかったのか。そしてあいづらは、えさを盗^{ぬす}むのに、たくさんの中からよりによってこの俺^{おれ}をえらんだ。どいう目安で俺に白羽の矢を立てたのか。そういうことを考えることは、あまりゆ快なことではなかった。連れでもいたら、その連れに話すことで、いく分気持は軽くなるだろうが、僕はその時ひとりだった。口下手^{くべた}な僕は、ことにそのころは性質もしめっていて、防波堤でもどの常連とも会話すら交わしたことはなかったのだ。

問七

まあその日から一週間ばかりたった。やはりくもったような天気の日だった。前の日とちがって、魚の当たりが悪かった。潮加減がよくなかったのだろう。僕は朝からつれないでいい加減くさっていた。その上岩にひっかけて、糸を何本も切らしていた。昼の弁当を食い終わっても、僕のびくはほとんど空だった。そこでもう今日は止めて帰ろうと思ったのだ。

そしてふとふり返った時、そこにこの問の子供がいたのだ。この前と同じように、兄弟並んで、ぼんやりと海をながめている。その時僕は、ほとんど無意識に、そして彼らに気付かれないように、自分のえさ箱をわきに引

問八
しゃん

き寄せていたのだ。次の瞬間、その自分のやり方が急にあらあらしく僕に反発してきた。れいのジタバタが始まった。

「ふん」

問九

と僕は思った。そんならあの子供たちに、今日はこちらからえさをわけてやる。そんな思いつきがとたんに頭をかすめた。もうどうせ帰るのだから、残りのゴカイは不^ふ用なわけだ。ゴカイというやつは、とても条件を良くしないと、翌日まではもたないのだ。

僕は立ち上がった。えさ箱をぶら下げて、ためらわずに兄弟に近づいて行った。

足音を聞いて、兄弟はふり向いた。警かいするように二人の表情はとつ然するどくなった。兄の方は、よりそってきた弟をかばうように、身体を動かして構えた。その兄の目付きは、僕をたじろがせるほどはげしかった。

問十

「えさをやろうか。え？」

さり気なく言ったつもりだが、あるいは兄弟はその語調のうらに、なにか底意を感じたのかも知れない。

「えさがないのだろう。いらないのか」

子供のかたわらのえさ箱は空で、底には少量のどろがかさかさにかわいている。兄は警かいの色をますます深め、じっと僕をにらんでいる。にらむとこの子はやや眇^す目になるのだ。弟の方の顔はしだいにくずれて、今にも泣き出しそうな顔になった。しかし泣き出しはしなかった。目をキラキラさせて、くちびるをかみしめている。

問十一

僕はしだいに自分のこんなバカな思い付きを後かいし始めていた。しかしこのままではひっこみがつかない。僕は少しいらだって来た。

「えさ、欲しくないのか」

笑って見せようとしたが、笑い顔にならなかったかも知れない。僕はえさ箱を目の前につき出そうとした。

その時とつ然、兄の方がいやにはっきりと答えた。

「いらん！」

そうか、と僕は言い、しかし俺はもう帰るし、どうせえさは捨てるんだから、要るのなら置いてゆくよ、とまだ言い終わらないうちに、

「いらん」

とも一度兄が言った。ほとんど同時に弟がくちびるを曲げるようにして、
「いらないぞ」

とつけ加えた。兄の声は、前ほどつっけんどんではなく、やや弱々しくひびいた。そうか、としかし僕もすこしむっとした。しばらく視線を合わせていたが、僕はつき出したえさ箱のかっこうがつかず、そのままゴカイを放り出すようにして海面に捨てた。三人の視線は一度にその方に動いた。

問十三

赤くもつれ合ったゴカイは、ひとかたまりのまま緑色を帯びた海水に落ち、そこでやわらかくほぐれ、数条の赤い模様をつくり、美しくのび縮みしながら、しずかにしずんで行った。しずんで見えなくなるのを見届けて、僕は子供に背を向けた。

(梅崎^{さき}春生「魚の餌」^{えさ})

〈注1〉糸巻きにつり糸を巻きつけて糸をくり出したり巻き取ったりする装置がついているさお

〈注2〉取った魚を入れるための器

〈注3〉つり糸につけて魚がえさに食いついたのを知らせる目印

問一 えさがなくなった出来事の前、「僕」は防波堤で出会った「兄弟」をどのような子供たちだと感じていますか。

- 1 本職の漁師にも負けないほどのうでを見せつけようとしている生意気な子供たち
- 2 貧しい家庭に暮らし、日ごろから魚をつって家計を助けている子供たち
- 3 毎日のように防波堤に通ってつりに夢中になっているむじゃきな子供たち
- 4 漁師の家に生まれ、つりの技術を一生けん命にみがいている子供たち

問二 部「えさ屋で買うゴカイが、つぶがそろって生きがよければ、僕の心はおどる」とありますが、なぜですか。

- 1 いきいきとしたゴカイを自分の思い通りにできると思うと、活力をあたえられる気がするから
- 2 新せんなゴカイが手に入ればあらゆる魚がつれると思うと、うれしさがこみあげてくるから
- 3 つぶがそろって赤い色があざやかなゴカイだと、ぶきみな形でも気持悪く感じないですむから
- 4 質の良いゴカイをふんだんに使えると、つりの玄人になったようなほこらしい気分になるから

問三

——部「盗ったな！ 僕ははっとあたりを見回した」とありますが、このときの「僕」の説明としてふさわしいものを選びなさい。

1 たくさんいたはずのゴカイが、つり糸を垂らしながらぼうっと考え事をしているうちにいなくなっていたので、我に返りだれが盗ったかあわてて確かめようとした

2 戦争中で物が不足している時代だったので、貴重なえさであるゴカイが盗まれたことをどうしても許せず、何が何でも犯人を見つけようと息巻いていた

3 兄弟が大人^{おとな}以上に魚をたくさんつりあげる理由がやっとわかったと同時に、他人のえさを盗むというひれつな手を使うことにいきどおりを覚えた

4 えさ箱があらされ、自分の心をおどらせたゴカイがうばわれたことにいかりを覚え、えさがなくなつてひまを持て余している子供たちのしわざだとつさに確信した

問四

——部「ふり返って僕をながめていたらしい小さい方の子供の視線と、僕の視線がパッと合った。急におびえた表情になって、視線を外らして、すこし身体を兄の方にはずらすようにした。兄の方は、だまつてつり糸を垂れたまま、じっとうきをながめている」とありますが、「僕」はこのときの「兄弟」の様子をどのように見えていますか。

1 弟は他人の顔をじろじろ見ていたぶしつけな態度を見とがめられてあわてふためいており、兄はばつの悪さをごまかそうと身を固くしている

2 弟は動き回つてつりのじゃまをしたことをしかられるかもしれないという不安で泣き出しそうになっており、兄は幼い子供には手を出せまいとたかをくくっている

3 弟はゴカイがいなくなつてとほうに暮れている僕が気の毒でいたたまれなくなつており、兄はめんどろ

に巻きこまれまいと知らず顔をきめこんでいる

4 弟はゴカイを盗んだことがばれたのではないかという恐怖^{きょうふ}感で逃げ出したくなつており、兄はゴカイを盗んだことをかくし通そうと気を張っている

問五

——部「向こうも内心ジタバタしているが、別の意味でこちらもジタバタしている」について答えなさい。

① 「向こうも内心ジタバタしている」とありますが、「僕」はこのときの「兄」をどのように見えていますか。

1 僕が見つめているので逃げるに逃げられないし、さおを引き上げたら盗んだゴカイが見えてしまうし、動きが取れずうろたえているが、動ようを見すかされまいと平静をよそおっている

2 ゴカイを盗んだのが自分たちであることに僕が気づいているのかどうか知りたいが判断がつかず、これからどのような行動に出たらよいかわからなくて僕の様子を注意深く観察している

3 自分から近づいてきたのに声をかけるわけでもなく、それでいて何か言いたげに自分たちのそばに張りついてくる僕の存在にへきえきし、わざと獲物^{えもの}をのがして関心をそらすとしている

4 ゴカイを盗んでしまったことを非常に後かいているが今さら謝ることもできず、かといって僕に無言でにらまれると謝らないわけにもいかず、なやむあまりつりに身が入らないでいる

② 「別の意味でこちらもジタバタしている」とありますが、このときの「僕」の説明としてふさわしいものを選びなさい。

- 1 すぐにゴカイを返して謝ろうともせず僕の存在を無視してつりを続ける子供たちのふてぶてしい態度におどろきあきれている
 - 2 盗みを認めようとしないう子供たちがにくいはずなのに、にらみつける僕におびえる子供たちを見るとふびんにも思われ困わくしている
 - 3 子供たちにいかりをぶつけることも大人らしく事態をおさめることもできず、どうしてよいかわからなくてあせりを感じている
 - 4 絶対に子供たちがゴカイを盗んだと確信しているのに、子供たちを犯人として追いつめる決定的な証拠が見つからずむきになっている
- ③ このときの「子供たち」と「僕」の様子を象ちように表している一文をぬき出し、最初の五字を書きなさい。

問六

――部「ひざ頭までひたす海水を、はねのけるような気持で進みながら、何だかやり切れない感じがしだいに強くなって来た」とありますが、このときの「僕」の説明としてふさわしいものを選びなさい。

- 1 ゴカイを盗まれたことで生じたむしゃくしゃした気持をすべてふりはらおうとやっきになっているうちに、何もかもがいやになってきている
- 2 ゴカイを盗まれたことに對するくやしさを辺り一面にぶつけているうちに、管理のあまかった自分自身にも思い当たって反省し始めている
- 3 あくまでも自分の方が正しいと必死に自分に言い聞かせるが、子供たちにふり回されてまったく正義が

通らなかったことにむなしさを覚えている

- 4 ゴカイを盗んだくせに平気な顔をしている子供たちのことはどうにも許せないが、子供相手にケンカをするのも大人げないので平常心を取りもどそうとしている

問七

――部「やはりくもったような天気ハッキリしない日だった」という一文は、この文章の中でどのような効果をあげていますか。

- 1 魚の引きを楽しむために防波堤にやってくる何の変てつもない僕の日常がくり返されることを印象づける効果
- 2 先子供たちにゴカイを盗まれたのと同じようなしゃくにさわる出来事が再び起こることを暗示する効果
- 3 くもって日光がささないような日はゴカイの色もあざやかに見えず、僕の気持も乗らないことをほのめかす効果
- 4 その日はつりに向いていない天気で、いつまでねばっても魚は一匹もつれるはずがないことを強調する効果

問八

——部「次の瞬間、その自分のやり方が急にあらあらしく僕に反発してきた」とありますが、このときの「僕」の説明としてふさわしいものを選びなさい。

- 1 自分のつりの楽しみをじゃましている子供たちなのに、えさをかくして彼らが二度と悪事を働かないように気をつかっている自分の人のよさにあきれ果て、いやけがさしてきた
- 2 口下手なあまり子供相手にうまくやれるはずがないと最初からあきらめて、どうしても人と関わらないようにしようとする内気な自分に気づき、悲しくなってきた

- 3 えさを盗んでも悪びれない子供たちの厚かましさに庄とうされてしまった自分の気の小ささを思い出して、日ごろからいだいていたゆううつな気分がますます強まってきた

- 4 子供たちの姿を見ただけでまたえさを盗られるかもしれないと警戒いし、こっそりえさをかくすようにした自分自身のいくじのなさが情けなく、腹立たしくなってきた

問九

——部「今日はこちらからえさをわけてやる」とありますが、ここから「僕」のどのような気持が読み取れますか。

- 1 大人げなく動ようしてしまった前回とは異なって、すべてを受けとめるおだやかな大人でいたい気持
- 2 盗んだことをさとしもなかった前回とは異なって、子供たちの方から謝るように仕向けたい気持
- 3 何も言えずに引こんだ前回とは異なって、相手の意表について先制こうげきし優位に立ちたい気持
- 4 にらむことしかできなかった前回とは異なって、二度と盗みを許すつもりはないとわからせたい気持

問十

——部「『えさをやろうか。え?』さり気なく言ったつもりだが、あるいは兄弟はその語調のうらになにか底意を感じたのかも知れない」とありますが、「兄弟」がどのような「底意」を感じたと「僕」には思われたのですか。ふさわしいものを二つ選びなさい。

- 1 持ち帰るのがめんどうだからゴカイをおしつけよう
- 2 人のえさを盗むほど貧しいとはあわれだ
- 3 盗みを働いたと親に言いつけてやろう
- 4 えさで手なづけてつりの秘けつを聞き出そう
- 5 自分たちがゴカイを盗んだ犯人だと白状しろ
- 6 ゴカイをやるから自分の代わりに魚をつれ

問十一

——部「僕はしだいに自分のこんなバカな思い付きを後かいし始めていた」とありますが、なぜですか。

- 1 自分の自尊心を守ることしか考えられず子供たちを追いつめ過ぎ、結果的に彼らの自尊心をふみにじってしまっていることに気づいたから
- 2 せっかく子供たちのことを思いやった自分の行為が台無しになりそうで、かたくなに反こ^いう的な態度をとり続ける子供たちにいきどおりを感じたから
- 3 ゴカイを盗まれた被害者である自分の方からわざわざ子供たちに歩み寄ろうとするのは、やはり筋ちがいでふさわしくないと思い直したから
- 4 子供たちにおだやかな口調で声をかけようとしたがきん張してぶっきらぼうになり、かくしていた敵意がむき出しになったから

問十二

——部「その時とつ然、兄の方がいやにはっきりと答えた。『いらん!』とありますが、このとき「僕」は「兄」の様子をどのようにとらえていますか。

1 物ほしげにえさを見ていたわけでもないのに僕がしつこくえさをやると言うのでめんどろになり、早く追いはらおうと威嚇^{いかく}している

2 先日ゴカイを盗んだ犯人だと自分たちを疑っているから近づいてきたのだと察し、自分たちの潔白を僕にわかってもらおうとうったえている

3 僕の申し出が悪意からであろうが好意からであろうが、すきを見せて決して心を許すまいと必死にきよ絶する姿勢をとっている

4 とつ然手のひらを返したようにおだやかになった僕の状態にうす気味悪さを感じおびえているが、僕にさとられまいと虚勢を張っている

問十三

——部「赤くもつれ合ったゴカイは、ひとかたまりのまま緑色を帯びた海水に落ち、そこでやわらかくほぐれ、数条の赤い模様をつくり、美しくのび縮みしながら、しずかにしずんで行った。しずんで見えなくなるのを見届けて、僕は子供に背を向けた」とありますが、このときの「僕」の説明としてふさわしいものを選びなさい。

1 僕からも子供たちからも捨てられたゴカイが、海の中でしなやかにのび縮みするいきいきとした姿を取りもどしたのとは対照的に、何をして子供たちと良好な関係を築けなかった自分の無力さを痛感した

2 もつれ合ったゴカイがやわらかくほぐれて海にしずんで行く様子を見て、子供たちとの間で複雑にからみ合っていた思いもゆっくりと消えてゆき、これまでの出来事が終わりをむかえたと自覚した

3 えさを盗んだにくりしい子供たちに見せつけるように投げ捨てたゴカイが、緑色の海の底に広がりなが

らしずんでいく様子を見て、子供たちへの復しゅうを完全に成しとげたように感じ満足した

4 赤く色あざやかなゴカイが緑色の深い海の底へとしずんでいく美しさに目をうばわれて、子供たちとのいざこざでジタバタし続け弱っていた僕の心もなごみ、すべてのことが心温まる思い出になると感じた

「二」次の文章を読んで後の問に答えなさい。なお、一部本文の省略があります。

自分が音楽にどう反応^{のう}しているかをきちんと聴^きき取ってあげる——実はこれはそんなに簡単なことではない。マスメディア時代に生きる私たちは、音楽を聴くより以前にすでに大量の情報にさらされているし、知らないうちに「音楽の聴き方」についていろいろなことを刷りこまれている。それに他人の意見や反応だって気になる。そして私自身が音楽を聴くときの目安にしているのは何かといえば、それは最終的にただ一つ、「音楽を細切れにすることへのための気持ちが悪くか否か」ということである。細切れとはつまり、演奏会の途中で席を外したり、CDなら勝手に中断したりすることだ。何かしら立ち去りがたいような感覚と言えはいいだろうか。音楽という不可逆^問にして不可分の一つの時間を、音楽とともに最後まで共同体験しようという気持ちになれるかどうか。自分にとってそれが意味／意義のある音楽体験であったかどうかを測るサインは、最終的にこれ以外ないと思うのである。

これは「分かる」とか「よかった」とか「ぐっと来る」とか、そういうこととは必ずしも関係ない。すぐにはピンと来ないかもしれない。だが、たとえ一ぱんの意味で「よかった!」という感想を持つわけではなかったとしても、「これは最後まで聴いてあげなくてはいけないものだ」という感情がどこかにわいてきたとすれば、それこそが「縁^{えん}」というものだ。それは音楽を通して一つの時間を自分とともに体験する隣人^{りん}——音楽の作者や演奏者もふくむ——への敬いの気持ちであり、音楽を何かしら命あるものとして感じている証^{あかし}なのだと思う(中略)。

西村朗^{あきら}および小沼純一^{こぬま}との鼎談^{てい}で三輪眞弘^{まさひろ}は、次のようなことを言っている（雑誌『洪水』^{こうすい}第三号、二〇〇八年）。

「たとえば着メロとか、僕はそうとうたえがたいんです。なぜかという、曲が始まって、途中で切らなければならぬわけです。もし音楽が好きだという人がいたら、そんなことがどうしてできるんだろうとまずは思うわけです。つまり好きなグループの作品を着メロにしたとする。好きなグループなのにどうして途中でばっさり切れるのという、そういう感覚を僕は持っているんです。そういう意味で、多分その人にとっての着メロは僕が考えている音楽とはちがうものなんだろうと。たぶんなんらかの情緒^{ちゅうじョ}を喚起^{かんき}するものであるだろうけど、シグナル^{問三}みたいなもの、パプロフの犬^{注二}みたいなものであって、僕が考えている音楽とはかけはなれているものだと思います」。

近年、ポストモダン的な「自由な聴取^{ちョウ}」をことさらにもてはやするような風潮があって、最新の録音／再生メディアが可能にしたところの、聴き手が元の音源を好き勝手に切ったりはったり、重ねたり反復したりする聴き方によって、まるで音楽体験の新しい地平が切り開かれるかのような論調を目にすることも、まれではない。だが三輪と同じように私は、「時間の一回性／不可分性／不可逆性の共有」——後にもう一度ふれようと思うが、私はこの「不可分性」の定義をかなり広くとっている——こそが、音楽が音楽であり続けるための最後のとりでだと信じている。この一線をこえてしまったら、それこそ音楽は三輪の言う「パプロフの反射反応」＝「シグナル」に墮^だしてしまうだけではないか。確かに音楽は生理的な次元に大きく左右される。だが音楽体験のすべてが単なる刺激／反応^{かん}に還元されてしまったら、それはもはや音楽ではない。別の言い方をすれば、もし何らかの演奏会やCDを中座／中断しても何の痛痒^{よう}も感じなかったとすれば、その人にとってそれは音楽＝生命ではなく、ただのシグナル＝モノだったということだ。

（岡田暁生^{おかあけお}『音楽の聴き方』）

〈注1〉三人が向かい合って話すこと

〈注2〉旧ソ連の脳生理学者パプロフが、イヌに一定の波長の音を聞かせたときに食物をあたえ続けると、後にはこの音を聞かせただけでもだ液が出ることに気づいた

〈注3〉近代に生まれた進歩や機能を第一とする考え方を批判し、脱近代^{だつ}をめざすけい向

〈注4〉ここでは、情報を記録することのできる電子機器のこと

問一——部「不可逆にして不可分の一つの時間」とありますが、ここではどのような時間のことを言うのですか。

問二——部「音楽を何かしら命あるものとして感じている」とありますが、「命あるもの」とはどのようなものですか。

- 1 聴き手の五感を刺激するもの
- 2 聴き手の人生経験を豊かにするもの
- 3 聴き手の感情と結びつきをもつもの
- 4 聴き手の自由な空想を広げるもの

問三 「三輪眞弘」は「着メロ」について「シグナルみたいなもの、パプロフの犬みたいなもの」（——部）と言っています。筆者はどのような言葉で言っていますか。本文中から五字以上、十字以内でぬき出しなさい。

問四 この文章で筆者は、音楽体験とはどのような体験であるべきだと主張していますか。わかりやすく四十字以内で書きなさい。

問五 テレビ・ラジオのコマーシャルソングや電車の発車メロディーのような、一部分だけを用いた音楽について、良い点と悪い点の両方を挙げながらあなたの考えを二百字以内で書きなさい。

〔三〕次のA・Bの文の――部と言葉の働きが同じであるものを選びなさい。

A セミの声を聞くと、子供のころの夏休みのことが思い出される。

1 いつもは元気なのに今日は欠席している友人の様子が気づかれる。

2 東京から福岡までは新幹線と飛行機のどちらでも行かれる。

3 ぼくは他人から冷たい人と思われるようなことだけはしたくない。

4 この春退職して故郷へ帰られる先生の送別会を計画している。

B 学校の門の前で待ち合わせよう。

1 雨が降りそうであわてて帰った。

2 君は一人ではない、友がいる。

3 たのんでおいた本がようやく届いた。

4 子供たちは公園で遊んでいる。

〔四〕「たとえば」「断じて」という言葉を両方用いて三十字以内の文を一つ作りなさい。

〔五〕次の――部1～5のカタカナの部分を漢字で書きなさい。また――部6～8の漢字の読み方をひらがなで書きなさい。

座席へミチビク

約束をシツネンする

長年のコウセキをたたえる

畑をタガヤす

シガイチの中心に公園がある

定期券を拾得する

規則に基づく

山の頂

（問題は以上です。）

*問題文に使用した作品における難しい漢字表記は、現在一ぱんに使われている漢字またはひらがなに改めるか、読みがなをほどこすかしてあります。また、送りがなを加えたり取ったりしたものもあります。

番 号
氏 名

問十三			
問八	問九	問五②	問一
			問二
	問十		問三
		問六	
			問四
	問十一		
		問七	
			問五①
	問十二		

[illegible][illegible]

5	1
6	2
7	3
8	4